

サンドラールと ル・コルビュジエのブラジル 1920年代の邂逅

彦江智弘

ブレーズ・サンドラールとル・コルビュジエ。19世紀末の同じ年にわずか1ヶ月の違いで同じスイスの街に生まれた作家と建築家。そればかりかふたりの生家は通りを二本隔てたにすぎない同じ街区に位置していた。はたしてこのようなめぐり合わせはいかなる出会いをふたりに用意するのだろうか？

普通ならここから幼少期に始まる濃密な交流の歴史が紡がれていくことが予想されるだろう。ところがサンドラールとル・コルビュジエに関しては、ことは必ずしもそのような成り行きをたどることはなかった。実際、後にみるように、ふたりの出会いを語るには1922年にパリで開催されるサロン・ドートンヌを待たなければならない。そのときふたりはすでに30代も半ばにさしかかっていた。その一方で、ル・コルビュジエとサンドラールの間には決して少なくない共通点がみいだせるのも事実である。故郷のスイスを離れ、いくつかの国を遍歴した後にパリにたどり着き、ともにフランスに帰化する道を選ぶ。しかもあたかもそれぞれ新たなアイデンティティのもとで生まれ直すかのように自身に新しい名前を与える。そしてふたりは、かたやモダニズムの建築と都市計画を牽引する建築家として、かたやアポリネールと並ぶフランスにおけるモダニズム文学の一角を占める作家としての地歩を固めていくことになるだろう。

しかもふたりともほとんど独学でこの道を切り拓いた。他にもサンドラールは第一次世界大戦で右腕を失い、かたやル・コルビュジエもほとんど同じ時期に網膜剥離で左目の視力を失っている。このようにそれぞれの活動にとって致命的な身体的欠損を被ったという事実によってもふたりは奇妙に似通っている。フェルナン・レジェのように共通の友人もいた。自身の経験をその著作の随所に織り込み〈自ら〉を語る傾向がル・コルビュジエに顕著であるとするならば、彼はサンドラールともども自伝的エクリチュールの人でもあるということになるだろう。だからといってこれらの共通点がことさらふたりを近づけることはなかった。1922年11月のパリでの邂逅以降ふたりの関係はサンドラールが逝去する1961年まで続きはするが、そここに親愛の徴がみられるとはいえ、むしろつかずはなれずの間歌的な交流が40年にわたって続いたにすぎないというのが正しいようにもみえる。

伝記上の符合など所詮この程度のものすぎないといえればそれまでであろう。しかしながら本稿では、主にフランス第三共和政期後半の1920年代におけるサンドラールとル・コルビュジエの伝記上の関わりの整理を試みる。これはル・コルビュジエがパリからモダニズムの建築と都市計画を喧伝するとともに、一挙に活動の場を世界に広げていく時代である。サンドラールの方でも世界を「回航bourlinguer」しながら、すでに様々なテキストを世に問うていた。この時代、ふたりの航路が交差するのがとりわけブラジルにおいてである。本稿では、サンドラールのテキストにおいてル・コルビュジエに代表される同時代の都市計画がいかに問いに付されるのかを検討するための準備作業として、この時期のふたりの交流の成り行きを主にフランス語文献に依拠しながら辿りなおす^[1]。サンドラールとル・コルビュジエの関係については、ジェイ・ボシュネールとラファエル・デプレシヤンによる「サンドラールとル・コルビュジエ 40年の友

[1] なお本論文では、ベルン大学のサンドラール文庫ならびにル・コルビュジエ財団所有の未刊行の資料の参照は叶わなかったことをあらかじめお断りしておく。

情」のような論考があるが^[2]、網羅的な研究はまだ存在していないのが現状である。またブラジルをめぐるサンドラールとル・コルビュジェの関係に取り組んだ研究としては例えばダニエラ・オルティス・ドス・サントスの研究が存在している^[3]。だがむしろふたりの相同性を強調しがちなその立場からはとりわけサンドラールのテキストを十全に読み解きえないように思われる。もとよりブラジルを介したふたりの関係については、情報は様々な研究のうちに散乱しており、本稿では紙幅の許すかぎりこれらを統合することに努めたい。そこでまずふたりの来歴から出会いを確認し、次いでブラジルの遷都計画をめぐるふたりのやりとりを整理する。最後にこの時代のサンドラールとル・コルビュジェとの距離感を確認しておきたい。

1.

冒頭で述べたとおり、サンドラールとル・コルビュジェは1887年にスイスのラ・ショー・ド・フォンで生まれた。サンドラールの誕生日が9月1日、ル・コルビュジェの方が10月6日なので、わずか1ヶ月ほどサンドラールが年長ということになる。このときふたりはまだサンドラールでもル・コルビュジェでもなく、フレデリック＝ルイ・ソゼールであり、シャルル＝エドワール・ジャンヌレだった。ラ・ショー・ド・フォンはスイスの時計産業の中心地のひとつであり、1794年の大火の後、アトリエでの時計組み立て作業の効率化をはかることに主眼をおいた都市計画が進められ、中心部が碁盤目状に再編されたことで知られる街である。すでにふれたとおり、ふたりの生家はラ・ショー・ド・フォンのこの中心部に位置し、わずかに通りを二本隔てたに過ぎない街区にあった。だがサンドラールとル・コルビュジェについては、幼少期に例えば公園や学校で顔馴染みになると

[2] Jay Bochner et Raphaëlle Desplechin, « Cendrars et Le Corbusier: une amitié de quarante ans », Monique Chefedor (ed.), *La Fable du lieu. Études sur Blaise Cendrars*, Honoré Champion, 1999, p. 67–81. 以降、本論考を参照する場合、ページ数のみ本文中に示す。

[3] Daniela Ortiz Dos Santos, « Blaise Cendrars et Le Corbusier: villes et voyages utiles », *Komodo 21*. URL: https://komodo21.fr/blaise-cendrars-corbusier-villes-voyages-utiles/#_ftref63 (最終閲覧日: 2023年11月4日). 以降、本論考を参照する場合は本文中で示す。

いう、ある意味月並みな成り行きを示す資料や証言は存在していない。その理由の一つに、フレディ——つまり後にサンドラールとなる少年——が7歳の年に一家がナポリに移住したことが挙げられるだろう。一家は2年後にスイスに帰国するものの、身を落ち着けたのはヌーシャテルだった。しかもここからさらにフレディの諸国遍歴は続いていく。ドイツの寄宿舎、モスクワとサンクトペテルブルクでの徒弟修行、ベルン大学の聴講生、そしてさらなる放浪の後、ついにパリへ。かと思いきや再びサンクトペテルブルクに舞い戻り、さらに今度はニューヨークへと旅立つ。ようやくパリに身を落ち着けるのが1912年のことである。フレディは25歳になっていた。この前後にフレディは本格的に文学活動に乗り出すとともに、自らブレーズ・サンドラールと名乗り始める。やがて第一次世界対戦が勃発すると志願兵としてフランス軍に従軍。翌年には砲撃を受け、利き腕——つまりペンを握る腕——である右腕を失うだろう。まだ幼いサンドラールがル・コルビュジエと生まれ故郷の街のどこかですれ違っていたとしても、その記憶もこのような流転の過程で薄れ、やがて失われていったのかもしれない。

一方、青年期までラ・ショー・ド・フォンにとどまったル・コルビュジエは、早くから絵の才能を発揮し、13歳で時計の彫金技術を修得するためにラ・ショー・ド・フォンの美術工芸学校に入学する。在学中にいくつかのコンクールで受賞するなど目覚ましい成果を上げるものの、生来の視力の脆弱さに加えて才能の発揮の場としての時計産業の枠組に限界を感じ画家を志すようになる。このジャンヌレに美術工芸学校の校長であるレプラトニエが、当地のファレ家の邸宅のファサードを手掛ける機会を与える。これがきっかけとなり18歳のジャンヌレは建築の道に進むことになるだろう。そして20代前半にパリのオーギュスト・ペレの事務所に、そしてベルリンのピーター・ベーレンスの設計事務所に短期間ではあるが籍を置く。その後、東欧、トルコ、ギリシャ、イタリアを巡るいわゆる「東方への旅」に出る(1911)。そして一旦ラ・ショー・ド・フォンに帰郷するものの、1917年にパリに新天地を見出すことになるだろう。そして20年

には画家のアメデ・オザンファンと雑誌『レスプリ・ヌーヴォー』を創刊。これを契機にジャンヌレはル・コルビュジエと名乗り始めるだろう。1922年には自身の設計事務所を開設。翌年には近代建築のマニフェストである『建築へ』を出版。同年のサロン・ドートンヌで自身の理論に基づく現代都市の祖型である「300万人のための現代都市」を発表。これが一大センセーションを巻き起こしたことは周知のとおりである。サンドラールがついに同郷のル・コルビュジエと出会うのがほかでもないこの計画案の展示の前でのことであった。

このときのことを回想したル・コルビュジエのサンドラール宛の書簡が残っている。1960年——つまりサンドラールが逝去する前年——にチャンディガールで認められたその手紙には次のように記されている。

軽い痛みがあるようですね。そうと知ってからずっと気にかけていました。

[…]

親愛なるサンドラール、心からの友情を！ 君との思い出。1922年のサロン・ドートンヌの巨大なジオラマの前で、ある人物が僕の方を向いて立ちただかっていたのです「ブラヴォー、すばらしいじゃないか！ 俺だよ、ブレーズ・サンドラールだよ！」非難ごうごうのなかではじめての励ましでした……。^[4]

だがどうやらこれがサンドラールとル・コルビュジエの初めてのコンタクトというわけではなさそうだ。なぜならこの時期サンドラールは小品ではあるが彼の文学上の転機とみなされている『魔法僧』の出版を画策しており、21年から22年にかけて話を進めていたのがほかでもないレスプリ・ヌーヴォー社だったからだ。その際にレスプリ・ヌーヴォー社とサンドラールとの間で交わされた遣り取

[4] 『ル・コルビュジエ書簡撰集』千代章一郎訳、中央公論美術出版社、2016、p. 535 (Le Corbusier, *Choix de lettres*, sélection, introduction et notes par Jean Jeanger, Birkhäuser, 2002, p. 457-458).

りを示す書簡が残されているが、そこにはサンドラールがル・コルビュジエに宛てた手紙も含まれている。この書簡には日付が記されていないものの、「ローマで8月15日にあなたにお目にかかれるのを楽しみにしています^[5]」と書かれているのは、映画撮影のための1921年のローマ滞在を指しているのだろうか。『魔法僧』はその抜粋が1921年4月発売の『レスプリ・ヌーヴォー』第7号に単行本の予約申込書とともに掲載されるにもかかわらず、書籍としての出版計画はこの年の10月に頓挫する^[6]。したがって11月にサロン・ドートンヌの展示の前で出会った際に、ふたりはこのように不首尾に終わった『魔法僧』出版計画の記憶を生々しく引き摺っていたはずだ。だが先に引いた1960年の書簡では——もちろんおおよそ40年後に病身のサンドラールに向けて行った回想がそうさせるのかもしれないが——この顛末がふたりの出会いに影を落としているとは思えない屈託のなさが際立っている。いずれにせよこのようにしてふたりの交友は始まった。

2.

その後、ふたりの関係はどうなったのか？ ふたりの同郷人が次に姿を現すのが1920年代後半のブラジルである。この時期のふたりの行き来がどのようなものだったのか、実際に会う機会がどれほどあったのか、あるいはなかったのか。これらを、網羅的に明らかにする研究はいまのところ存在していないようだ。しかし確実に言えることは、彼の地でふたりが再会したわけではないということである。ならばブラジルをめぐってふたりの間にどのような経緯が生じたのだろうか。1923年5月、フランスを訪れていた、ブラジルにおけるモダニズム運動の領袖である詩人のオズワルド・ヂ・アンドラー

[5] Lettre à Le Corbusier (non datée), Blaise Cendrars, *L'Eubage. Aux antipodes de l'unité*, édition établie par Jean-Carlo Flückiger, Champion, 1995, p. 229. なお同書では本書簡は22年7月と22年10月の書簡の間に配置されている。

[6] その経緯については前掲書および以下を参照のこと。Blaise Cendrars, *Œuvres romanesques complètes, t. I*, édition établie par Claude Reloy, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2017, p. 1471–1472.

ザとその妻で画家のタルシラ・ド・アマラウがパリのサンドラールを訪問する^[7]。サンドラールは夫妻と意気投合し、フェルナン・レジエやソニアとロベールのドロネー夫妻、あるいはコクトーやサティら馴染みの芸術家たちにふたりを紹介するだろう^[8]。オズワルドとタルシラの方でも、同じくパリに滞在していたパオロ・プラードにサンドラールを引き合わせる。同年の10月のことである。プラードは「コーヒー王」として知られるブラジルの大富豪で、プランテーション経営者であると同時にブラジルのモデルニスモ運動の庇護者でもあった^[9]。オズワルドの示唆もあり、プラードはサンドラールをブラジルに招くことを決める。このプラードの招待を受けたサンドラールがル・アーヴルでブラジル行きの汽船に乗り込むのが翌年の1月のことである。ブラジル滞在は8月まで続き、その間、サンドラールはモデルニスタたちと交流を図るとともに講演会を重ね、その一方で各地を回り、ブラジルの広報映画の企画をプラードに持ちかけるなど充実した日々を過ごした。その後、サンドラールが2回目のブラジル訪問に旅立つのが2年後の1926年である。今回も1月から約半年ほどブラジルに滞在している。そして3回目のブラジル渡航は27年の夏から翌28年の1月まで続いた。このように始まったサンドラールとブラジルとの蜜月はサンドラールのテキストの随所に痕跡を残すことになるだろう。例えば1953年にはジャン・マンゾンの写真にテキストを付したエッセイ『ブラジル』を出版しており、これだけでもサンドラールにおいてブラジルが形作る磁場が30年以上に亘る実に息の長いものだったことが窺われるだろう^[10]。

それではどのようなかたちでサンドラールのブラジル訪問がル・

[7] サンドラールのブラジル旅行の概略については、主に以下を参照した。Claude Leroy, « Chronologie », *ibid.*, p. LXIX-LXXV.

[8] Aracy Amaral, « Blaise Cendrars et Tarsila », Maria Teresa de Freitas et Claude Leroy (dir.), *Brésil. L'Utopialand de Blaise Cendrars*, L'Harmattan, 1998, p. 124.

[9] Maria Teresa de Freitas, « Portrait de Paulo Prada », *ibid.*, p. 30.

[10] ただしサンドラール自身のオートフィクション的語りでは、20年代以降もブラジルを訪れたことになっているが、実際には1927年の3回目の渡航が最後のブラジル訪問である (Miriam Cendrars, *Blaise Cendrars. La Vie, le Verbe, l'Écriture*, édition revue, corrigée et augmentée, Denoël, 1993, p. 513-514)。したがって1952年の『ブラジル』を執筆の際には、サンドラールが最後に彼の地に赴いてから25年が経過していたことになる。

コルビュジエと関わってくるのだろうか？ サンドラールがトランプレ＝シュル＝モドルからル・コルビュジエに宛てたある葉書には以下のように記されている。

EN年鑑をありがとう。アメリカ大陸から帰ってきたらこの本が届いていました。興味深いことがたくさん書かれていますね。いいですか、お伝えしたいことがあるのですが、憲法に盛り込まれている連邦首都の建設のための予算請求をブラジル政府が議会に行ったところです。100万人の都市の建設。いまなお処女地である「*プランアルティーナ*」にです！ これはあなたの興味をかき立てるはずだと思います。もしも関心があるのなら、関係者におつなぎしましょう。(Bochner et Desplechin: 72)^[11]

冒頭でふれられている「EN年鑑」とはル・コルビュジエが1925年にエスプリ・ヌーヴォー社から刊行した『近代建築年鑑』であろう——この本の書影を確認すれば、1925年の現代装飾工業美術国際博覧会に出品した「レスプリ・ヌーヴォー館」の壁面に描かれた「EN」を拡大した写真があしらわれていることが分かるはずだ。サンドラールはこの本が自宅に届いていることを、1926年1月から6月まで続いた2回目のブラジル訪問から帰国して発見したのであろう。だが献本に対する謝辞もそこそこにサンドラールがル・コルビュジエの関心を惹こうとするのが、ブラジルの首都建設計画である。以下、主に中岡義介と川西尋子による『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』を参照しながら、この首都建設計画のコンテクストを概観しておこう^[12]。ブラジルでは植民地時代から首都移転の問題が幾度となく議論されてきたという歴史があり、1889年に共和政

[11] なおボシュネールとデプレジャンによる引用では「PANALTINA」と綴られているが、「PLANALTINA」の誤り。同じ葉書が引用された次の論考では「PLANALTINA」と記されている。Yannis Tsiomis, « Introduction : Le Corbusier au Brésil - 1936 », Le Corbusier, *Conférences de Rio. Le Corbusier: Le Corbusier au Brésil - 1936*, Flammarion, coll. « Champs Arts », 2006, p. 24. 以降、本論考を参照する場合、ページ数のみ本文中に示す。

[12] 中岡義介・川西尋子『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』鹿島出版会、2014、p. 12-46.

が確立された後、91年に公布されたブラジル合衆国憲法の第3条で首都の移転が明確に定められることになる。サンドラールがル・コルビュジエに宛てた葉書でふれているのがまさしくこの条文にほかならない。周知のとおり、この遷都は最終的にルシオ・コスタを中心にオスカー・ニーマイヤーらが参加して設計されるブラジリアとして実現するわけだが、それは1960年のことにすぎない。このおおよそ70年の間に首都移転をめぐる様々な議論や調査が行われるのだが、実現に向けた最初の大きな動きがみられるのが1922年のことである。この年の9月に当時の共和国大統領であるペソアによって、現在のブラジリアの近郊に位置するプラナルチーナに首都移転の地としての礎石が据えられるのである。サンドラールがル・コルビュジエ宛ての葉書で「処女地」と形容するプラナルチーナは、実際にそもそも人口が希薄なセラード地帯の少集落にすぎなかった。

こうしてみるとサンドラールにブラジルとのつながりが生まれた時期が、ブラジルに遷都の機運が高まっていた時代だったということが分かる。この首都移転の機運の高まりにはどのようなコンテキストが存在していたのだろうか。1922年がブラジル独立百周年にあたるということもあるが、中岡と川西に従えば、これは経済発展を背景に文化的ナショナリズムが少なからず高揚していた時代でもあった。そもそも脱植民地化の過程でナショナル・アイデンティティの再構築が要請されるのは多くの植民地に共通する課題であろう。ただしブラジルの場合これが、植民地時代から貿易の中心地として発展し、帝政時代にも首都として栄えたりオ・デ・ジャネイロではなく、これらの歴史と訣別し、「生活様式や人種構成において真にブラジルの」な地に首都を据え直す「空間的ナショナリズム^[13]」として展開することになる。とりわけ第一次世界大戦後には、経済発展を背景にヨーロッパに対する劣等感が払拭されるとともに、ブラジルの文化を再考する知識人や文化人がサンパウロを中心に台頭し注目を集めることになる。そのメルクマールとなる出来事が1922年2月にサ

[13] 同上、p. 35.

ンパウロで開催された「現代芸術週間」である^[14]。この催しに参集したブラジルのモデルニスモを代表する芸術家たちはヨーロッパのモダニズムに比肩する芸術を目指しつつも、ブラジル固有の文化にこれを基づかせようとした。サンドラールがル・コルビュジエへの葉書のなかで言及するプラナルチーナに新しい首都の礎石が据えられた年には、このような文化的転換点をブラジルは迎えていたのである。この「芸術家週間」に参加した芸術家には、むろんオズワルド・ヂ・アンドラーヂとタルシラ・ド・アマラウも含まれていた。とりわけ中心的な役割をはたしたのがオズワルドだった。またこの芸術祭を資金面で支援したのがほかでもないパオロ・プラードである^[15]。

サンドラールがル・コルビュジエに向けてつなぐと提案している「関係者」とは、このプラードその人かプラードを介した有力者と考えて間違いないだろう。1926年には同じくフェルナン・レジェもル・コルビュジエをプラードに紹介しようとしていた。レジェがル・コルビュジエに宛てた書簡によると、「私の絵の愛好家であり、サンパウロで貿易と政治に関わる最有力者のひとりであるプラードから、全く新しい都市の計画を知らされた^[16]」(Tsiomis: 23)レジェは、プラードとの会食をル・コルビュジエに提案している。ここでレジェはプラードを政治に関わる有力者としてル・コルビュジエに紹介しているが、プラードは芸術運動の庇護者というだけでなく実際に政界にも出入りしており、例えばブラジルが連合国の一員として第一次世界大戦に参戦するための調印に臨んだ際の調印者の一人がプラードだった。1917年にブラジルに赴任し、この調印式にも参加したポール・クロードはプラードを次のように評している。「文化に関心を抱き心を震わせる大実業家であると同時に誰よりも忍びやかな芸術の庇護者であり、[...] コーヒー豆貿易の大御所であり、ブラジ

[14] 現代芸術週間については例えば以下に詳しい説明がある。木許裕介『ヴィラ＝ロボス ブラジルの大地に歌わせるために』春秋社、2023、p. 65-79。

[15] Maria Castro, "Paulo Prado", *The Modern Art Index Project* (August 2018), Leonard A. Lauder Research Center for Modern Art, The Metropolitan Museum of Art. <https://doi.org/10.57011/VGAQ1371> (最終閲覧日: 2023年11月4日)。

[16] プラードが所有していたレジェの絵画は、ブラジルに持ち込まれた最初のキュビズム絵画だと言われている (Maria Teresa de Freitas, «Portrait de Paulo Prada», art.cit., p. 35)。

ルにおける最も裕福で重要な州の(政治的)リーダーである」(Tsiomis: 21)^[17]。ル・コルビュジェが自身の計画を実現するための権威との関わりを強調していたことはつとに知られているが、ヤニス・ツィオミスによれば、このような立場は海外を訪問する際の「旅行者のストラテジー」(Tsiomis: 10)にも如実に表れている。この戦略には3つの段階がある。政治的・技術的権威との接触、専門家集団に対する講演会の実施、講演会で披露した自身の原理に基づく講演開催地の整備計画の提示である。このストラテジーは1929年のブラジルでの講演でもおおよそ踏襲されるのだが、ことブラジル訪問については渡航前から図らずも現地の権威と接触し、具体的なプランを作成したかどうかはさておき、首都建設計画に関わろうとしていたということになるだろう。

一方、サンドラールは1925年に出版した『黄金』を翌年になってル・コルビュジェに献本している。これに書き込んだ献辞でもプラナルチーナにふれているところをみると、サンドラールがかなり真剣にこのブラジル遷都計画をル・コルビュジェに薦めようとしていたことが分かる(Dos Santos: note 50)。ところが1926年11月15日付けのル・コルビュジェに宛てた書簡は次のように始まる。「あいかわらずブラジルからはなんの便りもありません。革命の報せがちらほらあるぐらいです^[18]」(Bochner et Desplechin: 70)。実際1922年以降、プラナルチーナ計画には具体的な展開が伴わず、ブラジルの政治状況の揺らぎとともに紆余曲折を続けていた。その一方で、1920年代後半はル・コルビュジェが活動の幅を一挙に拡げようとしていた時期でもあった。まず1927年5月にはジュネーヴの国際連盟の本部であるパレ・デ・ナシオンのコンペで一等に選ばれ、翌28年にはモスクワのセントロソユーズ(生活協同組合本部)とジュネーブのムダネウム(世界博物館)の設計に着手。また同年にはCIAM(国際近代建築会議)の創設に

[17] この点についてはサンドラール自身も『回航』のなかでふれている(Blaise Cendrars, *Bourlinguer, Œuvres autobiographiques complètes, t. II*, édition établie par Claude Reloy, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2013, p. 325)。

[18] Lettre à Le Corbusier (non datée), Blaise Cendrars, *L'Eubage, op.cit.*, p. 229. なおサンドラールがふれている「革命」とは、青年将校たちによる当時の政権腐敗に対する反乱であるテネンチズモを指していると考えられる。

参加することになる。とはいえパレ・デ・ナシオンはそもそも一等入選案が複数あり、モダニズム擁護派とアカデミー派が激しく対立した挙げ句、実施は別途選ばれた後者の側の建築家に託されることになる。ムンダネウムも議論的になったあげく竣工にはいたらず、実現したのはセントロソユーズのみであった。いずれにせよ1920年代後半のル・コルビュジエは活動の場を一挙にフランス国外へと押し広げようとしていたわけだが、このような射程の内にプラナルチャーナ計画も捉えられていたと考えることが可能かもしれない。

この時期、ル・コルビュジエが活動の場を国際的に拡張していくさまはサンドラールとのやりとりにも見て取れる。1927年5月13日にサンドラールがル・コルビュジエに宛てた短信には、次のように記されている。「ジュネーヴのよい報せにはとても喜びました。6月の終わりにはあなたのためにプラナルチャーナを射止めるようなんとかやってみます」(Bochner et Desplechin : 72)^[19]。もちろんこの「ジュネーヴのよい報せ」とはパレ・デ・ナシオンのコンペを勝ち抜いたことを指すのであろう。ここでサンドラールがふれる「6月の終わり」が具体的に何を指すのかは不明であるが、この年の8月から翌年の1月にかけて3度目で最後のブラジル滞在期間も含めサンドラールの奔走が実を結ぶことはなかった。1955年に発表された「ユートピアランド(誰のものでもない土地)」において、サンドラールは以下のようにこのあたりの事情を振り返っている。

ちょうど「遷都のためにブラジル政府が調査団を組織した」あの頃、「輝ける都市」の創案者であり私の友人であるル・コルビュジエに、調査団のことを報せ、そこに加わるチャンスがあることを伝えた。というのも私の知る限り調査団には有名無名にかかわらず建築家が一人も参加してはいなかったからだ。しかし当時ル・コルビュジエには他にやっつけなければならない仕事があり、ジュネーヴの国際連盟の宮殿のことですったもんだしていたし、

[19] 日付については、フランソワ・シャスランの推測に従った (François Chaslin, *Un Corbusier*, Seuil, 2015, p. 95)。

モスクワやニューヨークでも鏝迫り合いを演じていた[……。]。ともかく彼は正しかった。実のところいっさい差し迫ったことなどなく、調査団は旅行ばかりしているだけだったのだから。^[20]

この「ユートピアランド」は「ブラジルが首都を変える」というタイトルでまずは雑誌『マルコ・ポーロ』に掲載されたものである。つまりこれはブラジリア建設計画を受けての記事であり、だとしたらこのテキストに着手したサンドラールに1920年代後半のル・コルビュジエとのやり取りが去来するのは当然であろう。もとよりこのテキストはほかでもないル・コルビュジエに捧げられている。上の引用ではサンドラールはル・コルビュジエにまずは遷都の事前調査を行う調査団への参加を薦めたことになっているが、基本的には1920年代後半のやり取りが踏襲されている。だとするとやはりル・コルビュジエがパレ・デ・ナシオンやセントロソユーズに忙殺される一方で、ブラジル側でも遷都に対する動きが鈍化していたという事情がパラナルチーナ計画への関与の不首尾にとって大きかったのであろう。しかしだからといってプラナルチーナがル・コルビュジエの頭から抜け落ちてしまったわけではないようだ。実際、1929年7月28日付けのプラード宛ての書簡で熱のこもった言葉でプラナルチーナ計画にふれている。「実際、「プラナルチーナ」の夢が頭を駆け巡っています [……] あなた方の真新しい土地で私がここでとにかく専念してきた壮大な仕事のいくつかに取りかかれることができるならと考えています。嗜眠状態にあるヨーロッパ大陸では絶対に私の壮大な仕事の実現するわけありません」(Dos Santos: note 51)。この手紙はル・コルビュジエの南米講演旅行(9月から12月)の直前に書かれたものだが、ル・コルビュジエによれば、プラードとの関係はこれ以前から続いていたようだ。サンドラールがル・コルビュジエを首都移転の「関係者」として実際にプラードに「つないだ」のであろう、『プレジジョン』所収のブラジルでの講演録には次のような一節

[20] Blaise Cendrars, « Utopialand », *Œuvres romanesques complètes, t. II*, édition établie par Claude Reloy, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2017, p. 722.

がある。「[ブラジルでの講演会開催について]1925年以来、パウロ・ブラードはサンパウロから連絡してきていたし、サンドラールは弁舌と、地図と、写真とで私の背中をパリから押し出した^[21]」。この講演会については、実のところむしろル・コルビュジエの方からサンドラールにブラードへの取りなしを依頼したようだが(Dos Santos: note 54; Tsiomis: 21)、ブラードがスポンサーとなったことでブラジルは1929年の南米講演旅行の最終寄港地として付け加わることになる。上に引いたブラード宛ての書簡には、ブラジル訪問時にブラードを介してプラナルチーナ計画に再びアプローチしたいというル・コルビュジエの期待を読み取ることが可能かもしれない。もっとも『プレジジョン』に収録されたりオデジャネイロにおける講演ではプラナルチーナについては一切ふれられておらず、あくまでもサンパウロやリオといった既存の都市の再整備案の提示に留まっていることをみると、ル・コルビュジエ自身、ブラジルにおいて遷都の機運が後退していることを肌で感じ取ったのかもしれない。

3.

これまでたどってきたように、サンドラールがパウロ・ブラードと巡り合い、その一方でブラジルにおいて遷都の機運が高まるなか、サンドラールはプラナルチーナ計画をめぐってル・コルビュジエを後押しした。だがこの計画は実を結ばず、サンドラールを介したル・コルビュジエとブラジルとの関係は1929年のサンパウロとリオでの講演というかたちでかろうじて着地したかのように見える。ところがサンドラールが仲立ちしたブラジルとのつながりはル・コルビュジエの建築理論に大きなインパクトをもたらすものだったという仮説が存在している。エリザベス・D・ハリスの『ル・コルビュ

[21] ル・コルビュジエ『プレジジョン(上)』(1930)井田安弘・柴優子訳、鹿島出版会、1974、p. 39-40 (Le Corbusier, *Précisions sur un état présent de l'architecture et de l'urbanisme*, Altamira, 1994, p. 19-20)。ここでル・コルビュジエは「1925年以来」としているが、サンドラールが書き送った葉書が1926年だと推測されるので、正しくは「1926年以来」であろう。以降、本書を参照する場合、翻訳・原著の順にページ数のみ本文中で示す。

ジエ『ブラジルの危難』に依拠した中岡義介と川西尋子の議論である^[22]。中岡と川西の出発点は、ブラジルのコーヒーファゼンダの中心的建築物であるカーザグランデだ。コーヒーファゼンダとは、ブラジルのコーヒー豆貿易を支えたコーヒー大農場のことで、その広大な敷地にはコーヒー農園で働く奴隷たちやその監視人たちと共に農場主一家が暮らしていた。その農場主一家の邸宅がカーザグランデである。カーザグランデは2階建ての建物で、上階に直結する外階段、中央部分に造られたパティオ、水平に連続するガラス窓、ピロティによる自由な平面を確保するための独立柱や白い壁などが特徴として挙げられる。これらの特徴が、外階段を除けば、ル・コルビュジエが1927年に提唱したいわゆる「近代建築の5原則」(ピロティ、屋上庭園、自由なプラン、横長の窓、自由なファサード)に「すべて当てはまる^[23]」ことが指摘される。ここには含まれない外階段も、ル・コルビュジエの著作の随所に登場するドミノ住宅の透視図を確認すれば、必ずと言っていいほど描きこまれていることが分かるだろう^[24]。これは偶然の一致なのであろうか？ それともこのカーザグランデがサヴォア邸(1928-1931)などにおいて実際に適用される「近代建築の5原則」の着想源なのであろうか？

この「近代建築の5原則」が、コーヒーファゼンダが現れるより前のコロニアル時代の建築にすでにみられることはルシオ・コスタが主張した論点ではある。これを踏まえたとしても、ル・コルビュジエが初めてブラジルを訪れた際にパオロ・ブラード所有のファゼンダに滞在したのは1929年であり、それは「近代建築の5原則」を公にした後のことである。ならばカーザグランデとの類似はあくまでも偶然なのであろうか？ ハリスが強調するのは一種のインフォーマ

[22] 中岡義介・川西尋子『ブラジル都市の歴史 コロニアル時代からコーヒーの時代まで』明石書店、2020、p. 321-359; Elizabeth D. Harris, *Le Corbusier. Riscos Brasileiros*, Nobel, 1987.

[23] 中岡義介・川西尋子、同上、p. 330.

[24] ドミノ・システムは1909年からル・コルビュジエが研究を始め、1914年に提唱しとされるが、これについて中岡と川西は、バリの国立図書館において19世紀のブラジル建築を紹介した本を研究の過程で参照したのではないかという仮説を提示している(中岡義介・川西尋子、同上、p. 333-334)。

ントとしてのサンドラールの役割である。実際すでに引いたとおり、『プレジジョン』には「[ブラジルでの講演会開催について]1925年以来、パウロ・プラードはサンパウロから連絡してきていたし、サンドラールは弁舌と、地図と、写真とで私の背中をパリから押し出した」とある。確かに、例えば『回航』で描かれるように^[25]、サンドラールはブラジル滞在中にプラードが所有するファゼンダに幾度となく滞在しており、サンドラールがル・コルビュジエに書き送った手紙に現地の地図などと共にファゼンダの写真が添えられていたとしてもおかしくはないだろう。だとするとここでのル・コルビュジエの発言を信じるならば、少なくともサンドラールの初めてのブラジル滞在以降、ル・コルビュジエがファゼンダの様態をある程度知っていた可能性を否定することはできないだろう。

あわせて、ハリスに依拠しながら中岡と川西が問題にするのは、リオの都市計画のアイデアを南米に旅立つ前にサンドラールから得ていたのではいかという点である。ここで思いがけずピランデッロの名前を出さなければならない。ハリスによれば、このイタリアの劇作家は1927年にブラジルで講演を行っており、この講演の内容をオズワルド・ヂ・アンドラーヂが記録し、これがサンドラール経由でル・コルビュジエに伝わったところ、「地上100メートル、長さ6メートルの一本の巨大な自動車専用道路がうまれた^[26]」とされる。この仮説については、ル・コルビュジエ側からの傍証が存在しており、晩年のル・コルビュジエの編集者だったジャン・プティによる『ル・コルビュジエは語る』には次のような一節があるという。「リオの山の多い土地のカーブにしたがって、地上100メートル、長さ6キロメートルのアパートメントの建物を創造するために、コルビュジエはかつてのプランと縁を切った。このアイデアはサンドラールによって提案された^[27]」。この「地上100メートル、長さ6キロメートルの

[25] Blaise Cendrars, *Bourlinguer*, *ibid.*, p. 322 *et seq.*

[26] 中岡義介・川西尋子『ブラジル都市の歴史』、p. 343.

[27] 同上。ジャン・プティの『ル・コルビュジエは語る』(Jean Petit, *Le Corbusier parle*, Forces vives, 1967) は同じくジャン・プティの『ル・コルビュジエ みずから語る生涯』(Jean Petit, *Le Corbusier lui-même*, Rousseau, 1970) とは異なるので注意。

アパートメントの建物」とは、この建物の屋上部分が高速道路になっているとまでは書かれていないが、ル・コルビュジエが『プレジジョン』の「ブラジルの帰結」で提示するリオデジャネイロの都市整備案のことを指していると考えて間違いないだろう(177-178; 243)。これを踏まえると、「かつてのプランと縁を切った」、あるいは「[従来の]幾何学の精神からの逸脱なのか、それとも新たな精神の投影なのか^[28]」という問いの場となるリオのプランは、ル・コルビュジエの独創ではなく、サンドラールの「着想を採用^[29]」(168; 237)したものだということになるだろう。

ここではこのリオの整備案について、ル・コルビュジエの方でサンドラールからの影響を半ば認めていることになるが、実のところハリスが依拠するジャン・プティの『ル・コルビュジエは語る』には、サンドラールがル・コルビュジエにアイデアを与えたという上の一節に対応する証言は存在しない。その代わりにあるのは、1952年に出版された『サンドラールは語る』からの引用である^[30]。それはサンドラールがル・コルビュジエのリオのプランを回顧した一節である。むろんそこでも高架橋の上に高速道路を通し、その下部をアパート型の住居に充てるというル・コルビュジエのプランが問題になるのだが、この一節は「ル・コルビュジエは巨大な鉄の高架橋を建設するつもりになっていた」と始まり、「着想は愉快で、楽しませてもらった^[31]」と締めくくられる。このように述べる以上、サンドラール自身がアイデアはあくまでもル・コルビュジエのものだと認識していたと考えてまず間違いなからう。

その一方で、ここには「リオの山の多い土地のカーブにしたがって」という観点は見られない。はたしてこれは誰の着想なのだろう

[28] 八東はじめ『ル・コルビュジエ』講談社学術文庫、2022、p. 119.

[29] リオでの講演の聴衆のなかにリオの整備計画を進めていたアルフレッド・ガッシュがいることを意識したル・コルビュジエが着想を与えるのか採用するのかについて語っているこの件は、中岡と川西の論考ではドミノ・システムの着想源をめぐる文脈で問題に付されている(『ブラジル都市の歴史』、p. 332)。

[30] Jean Petit, *Le Corbusier parle, op.cit.*, p. 18. なおハリスの著作では『ル・コルビュジエは語る』の17ページを参照したとあるが、同ページにはサンドラールへの言及はない。

[31] Blaise Cendrars, *Blaise Cendrars vous parle...*, dans *Tout autour d'aujourd'hui, vol. 15*, édité par Claude Leroy, Denoël, 2006, p. 50-51.

か？ ここではこの点について若干の補足的な検討を加えておきたい。ハリスによれば、ピランデッロが行った講演が問題になっているようだが、このイタリアの劇作家は1927年8月11日付けの現地の『オ・ジョルナオ』紙において歴史家で批評家もあったセルジオ・ブアルキ・ヂ・オランダのインタビューを受けている。この同じブアルキ・ヂ・オランダが9月23日付けの同紙で今度はサンドラールにインタビューを行う。その際にサンドラールがピランデッロのインタビューの感想を次のように語っている。

『オ・ジョルナオ』のピランデッロのインタビューを読みましたよ。記憶に残っているのは彼が摩天楼について語っていることです。私の記憶違いでなければ、リオでは風景が描く線に適した建築を作ることが必要だと彼は断じています。これはいい。だったらポン・ヂ・アスカールやコルコヴァードの丘の高さのビルを建てるといのはどうだろう。仮にニューヨークのビルよりも2倍か3倍高いビルをここに作ったとしても、風景が描く線が損なわれるとは私には思えない。自然そのものが做うべき見本を示しているということだし、それに成長の危機に見舞われているあらゆる都市でこれからは摩天楼が救命ブイなのです。ためらう必要などありません。これはアメリカだけでなく、いたるところで、パリでさえもそうなんですから。高さ方向へのビルの展開は地価の絶えざる上昇の自然な帰結ですよ。^[32]

実際にピランデッロのリオでの講演の内容をオズワルドがサンドラールに伝えたということはあったのかもしれない。だとしてもサンドラールが『オ・ジョルナオ』の記事で摩天楼にまつわるピランデッロの考えにふれたことは事実であり、しかもここではインタビューというかたちでサンドラール自身の考えを直接確認することが可

[32] Sérgio Buarque de Holand, « L'avenir de l'homme blanc est surtout en Amérique du Sud », traduit par Maria Teresa de Freitas, Claude Leroy (ed.), *Rencontres avec Blaise Cendrars 1925-1959*, Non Lieu, 2007, p. 34. なおこの一節はハリスの著書でも引用されている (Harris, *op.cit.*, p. 22)。

能である。上記の引用以外にも、サンドラールの発言を受けてブルキ・ヂ・オランダがパリでは6階以上の建物が規制されていることにふれると、サンドラールはパリの事情を説明し始めるのだが、ピランデッロに立ち返って自身の発言を次のように締めくくっている。「ビルの高さが規制されていないパリの郊外では、いろんな街が生まれ始めていますよ。そこの建物は平均して10階か12階建です。ピランデッロの指摘は馬鹿げていますよ。これほど壮大な風景があるリオはビルが高さ方向に建てられることは許されることだし、必要なことでさえあるのですからね^[33]」。

ピランデッロのインタビューを参照することは叶わなかったが、少なくともこれらの発言からはサンドラールがピランデッロのインタビューにおいて何よりも記憶にとどめたのが摩天楼の問題だったということになる。そしてここからサンドラールが得た着想は、ニューヨークの摩天楼の数倍の高さのスカイスクレーパーを建てたとしても、ポン・ヂ・アスカールやコルコヴァードの丘が聳えるリオの街では風景が損なわれようがないというものである。だとしたら「ブラジルの帰結」で提示される、リオの海岸線に沿うようなかたちで描かれ、構造体の下部にヴィラ住宅を配置する高さ100メートルの「壮大な自動車専用道路」(177; 243)のアイデア自体はむしろル・コルビュジェ独自のものだと考えるべきではないだろうか。実際「ブラジルの帰結」に挿入されたリオを海側から見た立面図を確認すれば、もとよりポン・ヂ・アスカールの高さの建物は描かれていないばかりか、ヴィラ住宅が支える高速道路が描く水平軸での展開が強調されていることが分かるはずだ(179; 245)。またニューヨークのそれよりも数倍の高さの摩天楼という着想は一見すると、1935年のアメリカ訪問記『伽藍が白かったとき』におけるル・コルビュジェの主張を先取りしているように見える^[34]。だが危機に瀕した都市に対する処方箋としての摩天楼は、そもそも1922年のサロン・ドートンヌで展

[33] *Ibid.*, p. 35.

[34] ル・コルビュジェ『伽藍が白かったとき』生田勉・樋口清訳、岩波文庫、2007、p. 100-112 (Le Corbusier, *Quand les cathédrales étaient blanches*, Bartillat, 2012, p. 85-93)。

示した「300万人のための現代都市」においてル・コルビュジエが全面的に打ち出していた手法にほかならない。言うまでもなく、サンドラールがル・コルビュジエと初めて出会ったのは、このジオラマの前でのことであった。もしかするとサンドラールはピランデッロのインタビュー記事を読みながらル・コルビュジエの「300万人の現代都市」を思い浮かべていたのではないだろうか。すでに引いたとおり、サンドラールは1927年5月13日付のル・コルビュジエ宛ての短信に、「ジュネーヴのよい報せにはとても喜びました。6月の終わりにはあなたのためにプラナルチーナを射止めるようなんとかやってみます」と書いていた。このインタビューはその3ヶ月後のものである。

このようにブアルキ・ヂ・オランダによるインタビュー記事を踏まえるならば、リオでの講演で披露したアイデアをサンドラールから得たとみなす仮説には多少なりとも留保をつけるべきであるように思われる。それにブアルキ・ヂ・オランダによるインタビューで言及される「風景が描く線に適した建築」や「自然そのものが[提示する]倣うべき見本」というサンドラールの着想は、確かにリオの再整備案に添えられたスケッチにはふさわしいものであるように見える(179; 245)。だがその一方で、どうしてサンパウロの再整備案の方は高層のヴィラ住宅が支える高速道路を地形に沿わせるのではなく都市を直交する「水平の定規」(175; 242)として提示したのだろうか。むしろサンパウロの案の方が都心にスーパーグリッドを配置する従来のル・コルビュジエの手法に近く、渡航前の立案という仮説にはふさわしいようにも思える^[35]。少なくともリオの再整備案は、たとえばサンドラールが送った絵葉書や地図を参照したとしても、やはり実際に現地で飛行機の中から見た光景(176-177; 242-243)を元に立案したのではないだろうか。

[35] 八東はじめ、前掲書、p. 119.

4.

これまで辿ってきたように、サンドラールはひとえに親身になってル・コルビュジエを後押ししたように見える。この時期の書簡が「親愛なる友へ」と書き出されていることから分かります、その原動力は友情であったとみておそらく間違いないだろう。その一方でいくつかの書簡が示すように、この時期のサンドラールはル・コルビュジエをジャンヌレと呼んでおり、まだ「あなたvous」と呼びかける間柄だった。しかもル・コルビュジエに対するサンドラールの評価は必ずしも手放しのものではなかったようだ。1929年のブラジル講演について、サンドラールとプラードの間で書簡のやりとりが交わされている。その際にサンドラールがプラードに宛てた手紙には以下のような一節がある。

ジャンヌレの講演の成功は喜ばしい。彼は感じのいい男ですが、仕事の上では教条主義者です。[...] 結局のところ彼は「まごまごした男」で「臆病者」です。だからこそ彼の教義はさておき、好感が持てるのです。^[36]

「まごまごした男」や「臆病者」という語にあえて括弧をつけたニュアンスをどう汲み取るのかという問題はありますが、ここからはル・コルビュジエに対するサンドラールの評価が決して一面的ではなかったことが予想される。またこの書簡では「教義」の内容は明らかにされないが、すでに引用した1926年11月23日のル・コルビュジエ宛ての手紙はサンドラールが当時のル・コルビュジエの建築をどのように見ていたのを垣間見させてくれる資料でもある。この書簡は大

[36] Lettre reproduite dans Alexandre Eulalio, *A Aventura Brasileira de Blaise Cendrars*, 2^a edição, Edsup, 2001, p. 204. ここで「まごまごした男」と訳出した「un épaté」は通常「たまげた」程度の意味になる形容詞「épaté」を名詞化したものだが、この意味をそのまま踏襲すると後に続く「timide (臆病者)」とうまく並置されないという問題が生じる。しかしエオラリオによる本書に複製掲載された手紙の原文(タイプライターを使用)を確認すると確かに「épaté」と綴られている。そこでここではこの語をポルトガル語で「um “perplex”」(*ibid.*, p. 202)として訳出したエオラリオに倣い「まごまごした男」という訳語を採用した。

部分が10月に訪れたというペサックの集合住宅の感想に割かれているのだが、サンドラールは「ペサックの集合住宅」がモダニズム建築にありがちな冷たい単調さを纏っていないことをまずは評価してみせる。ところが徐々にトーンが変化していき、最終的には「住居についてのあなたのコンセプトをみる限り、あなたはフランスでは労働者階級ではなくむしろある種のエリートの方を向いているのだと思います。だからこそヴィラ・タイプの住居は「団地 cité」よりも容易に上手くいくはずです^[37]」と評する。

もちろんここでサンドラールはル・コルビュジェに対して労働者と向かい合い彼らのための団地を設計すべきであると説いているわけではない。それでもここにはサンドラールが同郷の建築家に対して微妙な距離感を印そうとしている様が垣間見える。それにサンドラールが労働者階級／エリート、ヴィラ／団地という問題の付置を描いてみせることも同じく重要であるように思われる。サンドラールによるこのような評価を、ペサックの集合住宅のみならず、「300万人の現代都市」(1922)や「ヴォワザン計画」(1925)といった同時代の都市計画案やブラジルでの経験に拡張すると何が浮かび上がるのだろうか——もとよりサンドラールは1922年のサロン・ドートンヌで「300万人のための現代都市」のジオラマで見て何を思ったのか？ またサンドラールが印そうとする微妙な距離感が、サンドラールのテキスト——パリ郊外の開発を糾弾する名高い章を含む『雷に打たれた男』(1945)や『パリ南西東北』(1949)などに限らずブラジルに関わる「ユートピアランド」のような他のテキスト——においてどのように刻み込まれることになるのか。サンドラールとル・コルビュジェというふたりの友の邂逅はこのような方向でそれぞれの作品の内部においてさらに辿り直されるべきものであるだろう。

(ひこえ・ともひろ 都市イノベーション研究院・教授)

[37] Lettre à Le Corbusier, Blaise Cendrars, *L'Eubage*, *op.cit.*, p. 229.

Abstract

Cendrars et le Corbusier au Brésil

Tomohiro HIKOE

Quelle pourrait être la relation des deux compatriotes qui sont nés la même année (en 1887), à un mois de près, dans le même quartier de la ville (La Chaux-de-Fonds en Suisse) ? Ils avaient du reste de nombreux points communs : ils ont abandonné la nationalité suisse pour se faire naturaliser français ; ils se sont donné ensuite un pseudonyme – Blaise Cendrars et Le Corbusier – comme s'ils renaissaient sous une nouvelle identité ; tous les deux ont commencé leur carrière comme autodidactes ; ils sont devenus représentants de la modernité poétique pour l'un et architecturale et urbanistique pour l'autre ; ils avaient d'ailleurs des amis communs comme Fernand Léger...

Or ces points communs n'ont pas vraiment rapproché, semble-t-il, ces deux Chaux-de-Fonniers. Ce n'est d'ailleurs qu'en 1922 qu'ils se sont rencontrés pour la première fois, lors du salon d'automne qui a lieu à Paris, devant la maquette de « Ville contemporaine de trois millions d'habitants » conçue par Le Corbusier. Certes, il existait bien une certaine amitié entre Cendrars et Le Corbusier, comme le montre leur échange épistolaire ; celui-ci nous apprend par ailleurs que leur amitié était plutôt intermittente et parfois teintée d'une certaine distance.

Dans cet article, nous reconstituerons toutefois les rapports entre Cendrars et Le Corbusier dans les années 1920. Ces rapports tournaient autour du Brésil, voire du projet de la nouvelle capitale brésilienne ; à cette époque, Cendrars y a voyagé trois fois, tandis que Le Corbusier a découvert le Brésil par l'intermédiaire de l'écrivain de *Bourlinguer*. Autour du Brésil, qu'est-ce qui s'est passé alors entre eux ? Quelle influence Cendrars a-t-il exercé sur la conception urbanistique de Le Corbusier concernant, surtout, le projet de Rio de Janeiro ? Quelle distance peut-on observer malgré tout dans l'amitié de ces deux compatriotes ? On examinera ces questions en retraçant leurs épisodes brésiliens.

(Professor, Institute of Urban Innovation)